

福岡大学病院総合周産期母子医療センター新生児部門における 超低出生体重児の短期予後（1991年～2000年）

森 聡子¹⁾ 木下竜太郎¹⁾ 中村 公紀¹⁾
太田 栄治¹⁾ 雪竹 浩¹⁾ 瓦林達比古²⁾
満留 昭久³⁾

- 1) 福岡大学病院総合周産期母子医療センター 新生児部門
2) 福岡大学病院総合周産期母子医療センター 産科部門
3) 福岡大学医学部小児科

要旨：1991年—2000年に福岡大学病院総合周産期母子医療センター新生児部門に入院した超低出生体重児の短期予後について後方視的に検討した。入院数138名のうち生存退院した児は91名（生存率65.9%）だった。在胎23週以下での生存率は9.1%だが、26週以上では80%以上だった。死亡例では早期新生児期に死亡した児が53.2%を占めていた。生存退院した児でも在胎週数26週未満では中枢神経合併症などの後障害を示唆する所見が57.1%に見られた。今後は在胎26週未満の超低出生体重児について検討し、予後の改善を目指す必要があると考えられた。

キーワード：超低出生体重児，短期予後，NICU